新潟の水辺だより Vol.50

●編集発行・新潟の水辺を考える会●発行日・2000年1月29日 Vol.50

TOPICS

多数決原理を補完する新しい対話型の民主主義を求めて

会長　大熊　孝

河川法が1997年に改正され、河川改修に住民の意見を反映させる道が開かれた。新潟でも、全国に先駆けて、通船川・栗ノ木川下流再生市民会議や通船川河口ワークショップなどが立ち上げられ、行政と住民が直接話し合う新しい民主主義が展開され始めている。このことは大いに評価されるべきことであるが、こうした話し合いは両者とも初めての経験で、住民側は従来の陳情型になりやすく、行政側は中央からの慣行を押し付けがちとなる。両者とも変化・成長していかなければならないが、それをうまく導いてくれる理念がまだ形成されていない。

こうした話し合いで問題になるのは、住民側の意見が必ずしも一本にまとまらず、どのように処理していいか戸惑ってしまうことである。特に、ボランティア的に集まってまとめた意見は、従来の考え方でいけば構成員全員の多数決で決めたわけでもなく、何の効力もないと否定されてしまうことである。また、できるだけ多くの人に参加してもらいたいということで新しい人に加わってもらっても、それまでの議論が蒸し返され、議論が進展しないというジレンマに陥ってしまうことがある。

われわれは第2次世界大戦以降、民主主義とは構成員の多数決で事を決することだと習い、小学校の学級会から国会まですべてを多数決原理で意思決定し、それに慣れ切ってきた。しかし、通船川市民会議やワークショップに関して、誰が構成員であるかを特定することは大変難しく、原理的に多数決原理を適用しにくい状況にある。仮にこれを決めるにしても、地域的にも事務的にも財政的にも無理があるといえよう。今、問題となっている徳島の吉野川第十堰に関する住民投票は、結局話し合いが暗礁に乗り上げ、住民側としては選挙権者による多数決原理に依拠する以外に方法がなく、結局は膨大な労力とお金をかけているわけである。こうした多数決原理は、今後のさまざまなパートナーシップによる意思決定には不向きである、と言わねばならない。

それでは、直接的な話し合いによる民主主義を進めるためには、どのようなルールが必要なのであろうか？

まず、その第1条件は、あらゆる情報が公開されていて、必要な時に誰もがその情報にアクセス可能であり、意見を言えるという体制が整っているということであろう。こうした体制が整っていれば、意思ある人は誰もが参画することが可能である。受動的に構成員にされる多数決原理と異なり、能動的な行動が構成員の資格ということになる。第2条件は、話し合いの会合は、1回や2回では参加できない人も多いわけで、参加しやすい土曜日などを中心として、少なくとも一つのテーマに関して原則的に1年から2年かけて20～30回は開くことが必要ということであろう。そして、第3の条件は、どんなに小さい会合であろうとも、ある程度の時間の積み重ねの上で共通認識となったことは尊重されなければならないということである。後からの新規参加者もそれを踏まえ、無駄な議論を蒸し返すようなことは慎む作法を身につける必要がある。第4の条件は、その共通認識を前提として、徹底した議論を通じて、異なる意見に折り合い点を見つける習慣を作るということである。

以上の新しい民主主義は、いままでの多数決原理が受動的で問題に対する認識が弱くても一票の効力があったのに対して、能動的で豊富な認識と議論が必要であり、価値観の相違を否定せず、利害の調整を行うための時間の蓄積を前提とした「対話」による民主主義といえよう。

情報の公開と発言の自由はインターネットの普及により保証することは既に可能である。そして、行政によって誰もが参加できる公開の話し合いの場が数十回保証されるならば、多数決原理を補完する対話型の新しい民主主義が確立されることは、十分可能であると考えている。

OPINION オピニオン

大久保 正史氏の投書を読んで

1999年11月10日の新潟日報に、大久保 正史氏の通船川の川づくりに関する意見が掲載されました。

この川に愛着を持ち、川づくりのワークショップに参加している市民の一人として、氏の意見に対する感想を述べます。

氏の論旨を要約すると次のようになります。

1.川のごく一部の改修に、住民参加型の意見聴取をやるのは、行政側の為にする手法である。

2.通船川のあるべき姿を、時間をかけて議論するのが先決で、そうしないと後世によい川は残せない。

3.山ノ下閘門を下流に移し、橋の下を船が通れるようになれば、川再生の主要なテーマが明らかになり、市民のアイデアが集まる。

第1の点では、私は「為にする」手法に加担しているという気持ちはなく、むしろ行政の英断だと評価しています。

私も参加する、通船川ネットワーク（市民団体や公民館、自治会などで構成）では、川のゴミ拾いや、生物・水質の調査、橋桁の高さや川幅の計測等をやりながら、子どもたちも含めた多くの市民と、川の再生の夢を語り合ってきました。このような活動は、全国的にも高く評価され、1999年の「川の日ワークショップ全国大会」では、グランプリを獲得しました。このような活動の中で、通船川の改修に当っては、市民の声を反映すべきだと行政側に提言を行ってきました。

緊急を要する災害復旧工事の実施に当って、ワークショップを採用したのは、この川が最初の例だと思います。私が「英断」と評価する所以です。

ただ、ワークショップの進行の中で若干気になっていることがあります。それは、緊急を要する災害復旧事業は、通常の河川改修事業とは別の次元の問題だというような意識が、参加者の中に少なからず存在しているのではないかということです。「通常」と「緊急」の違いは、時間と工事費のスケールに差があっても、治水を目的とした河川工事であるという本質に変わりはありません。

1998年5月に、建設省河川局監修の「美しい山河を守る災害復旧基本方針」が出されました。ここには「自然環境の保全に配慮した復旧を目指す」と明記されています。このような基本的な認識を確認し合いながら議論を重ねて、のぞましい通船川の設計図をつくりあげたいたと思います。

第2の点では、氏の意見に賛同します。私たちはすでに、通船川のマスタープランを提起しています。時代のニーズに対応した舟運を復活すること、水質を改善して川の生態系を回復すること、貯留機能を向上すること、市民と川のふれあいを重視して整備すること、などがその骨子です。

1998年に、市民と行政のパートナーシップによる「通船川・栗ノ木川下流再生市民会議」がつくられました。この会議の場で議論を重ねて、夢のある整備構想が出来あがることを希望し、微力ながらそのために努力をしたいと思っています。

第3の点では、氏の提案は非現実的だと思います。閘門や排水機場の移設費用と、橋の架け替え費用を比較すると、後者のほうがはるかに安上がりです。

私たちの調査では、通船川には37の橋や水道橋などが架かっています。その内、船が通れるのは半分以下です。新しい橋や、災害復旧で架け替えられる橋は、船の通れる高さを確保して作られるようになっています。舟運の障害を一挙に取り除くことは困難ですが、このような具体的な事例から、舟運の夢を描きだすことは出来ないでしょうか。私は、泥にまみれながら、多くの市民の皆さんと通船川に触れる中で、自分なりの再生の夢を描くようになりました。

この川は、江戸時代から、人間の「開発」という外力によって、数奇の運命をたどってきました。波瀾に満ちたこの川の歴史を、市民がともすほのかな光によって照らし出し、もの言わぬ川に、限りない労りの気持ちが伝わるような川をつくりたいと思っています。

世話人　石月　升

県内水辺レポート REPORT

通船川草刈り隊 第一回旗揚げを考える

1999年10月9日（土）第一回の通船川草刈り隊による、川岸の草刈りを行った。参加者は写真の通り、戸枝、進、高橋、星島、杉山、そして私横山の6名によってとり行われた。草刈り機による草刈りは皆未経験ということもあって午前だけで約100m程の道つけと苗木のマルチングを行っただけに終わったが秋の好日の草刈り共同作業は大変に気持ちのよいものだった。

さて私は5年前から通船川土手上に苗木の植栽、水遣り、草刈りの作業を一人で行ってきたが、通船川に私は何か出来るのかという想いと、都市河川通船川の再生には水質浄化と共に川岸の鬱蒼とした緑が必要であるとの想いもあって始めたものだった。そして体力の限界という以上にこの作業の社会的に至るプロセスをどう作ってゆくかという当初からの課題に対する一つのアプローチとして「通船川草刈り隊」を考えた。この企画が持続出来るものなのか、そしてどのような結果を生むのかは当面予測出来ない。だが少なくとも住民自ら汗と金と時間を費やして行う事業を無視し続けることは出来ないと思う。

草刈現場での記念写真
（左から戸枝、進、高橋、星島、杉山、横山）

今年も6月25日（日）と9月10日（日）の2回の草刈り隊による草刈り作業を予定しています。今年も昨年を上回る皆様の参加を得てにぎやかに行いたいと思います。ヨロシク！。

通船川草刈り隊長　横山　通

「今年も美味しかった ハス料理」

1999年9月25日（土）に第3回「佐潟でハス採り大会」が行われました。佐潟の自然と触れあおうと催してるハス採りも今年は台風一過、晴天に恵まれ、潟の水は少し冷たく感じましたが、参加者約30名がみんな、子供のようにハス根（レンコン）採りを楽しみました。

泥まみれになりながらハスを採る

初めての人は根が意外に深いので苦労し、経験者は太いのを採れたことを喜び、来年からはプロになれると豪語する人もいました。

恒例の食事会はレンコンと鳥のひき肉のダンゴ汁にヨモギなど謎の山野草の天ぷらに感動する人が多数、星島さん御苦労さんでした。

大人は子供の頃のドロンコ遊びを思い出し、子供は素直に楽しめます。今年の秋は皆さんご家族でぜひ、参加して下さい。

その佐潟の自然をもっと詳しく知ろうと、12月1日（水）会員対象に佐潟学習会が関屋地区公民館で行なわれました。佐潟の自然に詳しい伊藤定一さんと田中秀夫さんから「鳥から見た佐潟の自然」について話していただきました。詳しい内容は後日お知らせしますが、鳥のエサ場としての草地や水田の重要性が指摘され、参加者からも石川県片野鴨池での田んぼの復元など国・地方自治体・ボランティアによる水田復元プロジェクトが紹介されました。佐潟においても「見試し」として湿田や水田を作ってみてはという提案が出されました。

世話人　森本　利

OPONION オピニオン

水辺の会のNPO法人化の是非を問う！

「1987年の柳川掘割物語の上映をキッカケに始まった水辺の会が考える会から1996年の水辺で汗をかく会へ脱皮するのに約9年、その汗をかく会から水辺の改善・運営に責任をとる会へ脱皮できるかの2000年までに約4年。と考えれば通船川再生の活動が、会に発足から13年で水辺の環境改善・運営の責任を組織的持続的にとることを方向づけたといえます。」という書き出しをとっていいものかを230余名の会員のみなさんに問いかけるときが来ました。具体的にはすでに水辺の環境改善ボランティアNPO（非営利活動団体）として評価されている水辺の会のNPO法人（特定非営利活動法人）化の是非を問うご相談です。NPO法人とは？特定非営利活動法人といい、営利を目的にしない事業を行う目的をもった組織団体をいいます。

法人格を取得するメリットはあるのかと言えば

1.具体的な川づくりに絡む施設運営の依頼を直接任される主体と成りうる。その打診らしきものがすでにある。**=運営管理事業受託**

2.責任と実行力を持った組織とネットワークを背景にしていることが個々の会員の発言提言が説得力を持つ。**=自力本願で実践するパワーを提示**

3.任意でまちづくり、川づくりを進め調整する仕事をするよりもより多くの支援を得ながら進める体制がとれる。 **=ワークショップ等の調整、進行や教育・福祉・交流支援の体制**

4.人財や資金、情報、知識、設備、技術、ボランティア支援など多くのものがストックできその情報をより広範に伝えたり意見を集約することができる。**=情報収集・加工・発信力と寄付、基金、技術、施設、ボランティア時間などの集約**

5.新しい公共=市民事業を創りだすための調査・分析・企画・実践への事業プロデュースや個々の川・水辺の制度政策提案提言をする。**=アドボカシー役**

1999年10月の水辺シンポジウムでは水辺の会の法人化の是非をめぐって議論が交わされました。これからの水辺の環境改善は同時並行で水辺の現実社会を変えてゆく運動をしなければ本当の改善はできません。水辺の物理的な環境改善だけでどのくらい良くなったでしょうか？環境のハードをハードだけで変えてゆく効果の持続力の無さ、地域支持の無さは私たちは十分すぎるほど学習してきたのではないでしょうか？その中から川づくりは形だけのハード施設だけでなく、その使い方や使い道、あり様をめぐってソフト、技術、楽しみを大事にする意識ハートが一体として総合的につながっていかなければ「地域のための地域の川づくり」にならない。いままでは、川は洪水の吐き出し口、農業工業などの産業や水道利用の都市の利用水・雨水排水の対象でした。だから、行政や専門家の計算や技術に任せるしか無かったと思う。その結果、ゴミや時には死体まで投げ込む無残なドブ川を方々につくり出してきたのではないでしょうか。それに耐える植物や魚、虫、鳥だけが辛うじてそこに生きてきた。本当は誰もがそれでいいとは思っていない。でもドブ川。その意味では沿川の住民や環境改善を望む市民団体だけでなく、その川に関る産業も行政も技術者も全てその川のあり様を決定しているし、その善し悪しの結果を直接間接に受けとらざるを得ない運命共同体と言えるでしょう。

現実の川でパートナーシップを形に

1997年河川法が改正され治水、利水に環境が加わり三本柱になったこと、川づくりへの地域住民の関わりが重視されたことはご存知ですね。その追い風を受けながら都市の川”通船川再生の川づくり”を県、市の行政と住民、企業、団体、PTAのパートナーシップ（対等な関係）による全国初のモデルとして通船川・栗の木川下流再生市民会議（通称つうくり市民会議）を結成しました。水辺での生命安全や財産保全が全てに優先する規制側の行政と遊びや暮しの豊かさを水辺に求める創造側の住民、市民という水と油のような立場がどこでどんなふうに対等な関係=成果をあげられるのか？半信半疑ながら「魅力的ないい川に再生したい」という思いは共通であることを手がかりに公開討論会を数回開き、1998年暮れからは河口の排水機場・閘門周辺の環境改善ワークショップ（10回の予定で現在第9回終了）を続けてきました。突然の「8・4水害」による河川激甚災害対策特別緊急事業（激特事業）の実施状況下でどこまで対等な=パートナーシップづくりの努力の成果を生み出せるか予断はできませんが、大きな目標では一致しているという信念で最適な結論を見いだすことができるはずです。

すでに課題はその後を含めた数年後にあります。そこでは具体的に改善後の環境の管理運営の内容とそれに見合う運営の責任を市民側がどこまでとれるかが問われはじめています。ではその運営を市民が対応できればいいのかというとそれだけでは行政負担を肩代わりすることで終わってしまう怖れがあります。市民は果たして魅力的な愛せる川にするために運営などの責任をとるのです。

しかし、いま具体的に川の水質を改善する見通しはない。だから住民自ら、川の環境改善へ関るキッカケづくりに今までクリーン作戦や花筏、環境学習講座や川全体8.5kmのマスタープランづくりをしてきた。それだけでは非力。かつての川の魅力を知っている人の

インタビューマップづくりや川船外輪船の現代的就航の実現などイベントでなく着実で持続的な事業としてさまざまな取り組みをしなければならない。

行政のできる川づくりとしては、河川管理者の県の行なう川の護岸や橋、ポンプ場などの基盤整備、市の行なう沿川の都市を水辺と調和し水辺を生かすまちづくりに開発誘導する都市基盤整備です。それが限界でしょう。そこに企業や住民、農民、団体のする川を生かしたまちづくりがあってはじめて川はよみがえる。

その両者のパートナーシップ型の川づくりまちづくりを誰がするのか？より広範な団体企業の参加する通船川ネットワークは緩やかな活動連携団体。つうくり市民会議は官民のパートナーシップでの議論や計画の合意を得る場とすれば通船川ルネッサンス21などの組織が責任主体として受け皿となるのが望ましい。その条件整備を当面、水辺の会が担う必要がでてきました。具体的には数年内に山の下排水機場や閘門の動いている生きた資料展示ライブラリーとしての活用運営の仕事が予想されます。並行して通船川に関するパートナーシップ型の川づくりまちづくりのマスタープランづくりや短期中長期の再生事業など市民側も受け持つ半常駐的な仕事や担当を決めて継続的に取り組まなければならないさまざまな仕事が考えられます。

新しい公共=市民事業へ脱皮を

これからの生活基盤での公共事業は行政担当者とプランナー、専門技術者だけでする範囲は限定されて行くでしょう。住民、女性、子供など使い手である当事者の意向を受けて事業をすすめることは当然で、それだけでなく地域に管理運営の責任を果たせる当事者を育ててゆくことが不可欠となってゆきます。PFI(民間主導の公共事業)や大学の独立法人化など地域や組織に意思決定ができるという仕組みが現実味を持ってきている中で、NPO法人化を行政の肩代わりという受け身で考えるのではなく、積極的に川づくり、水辺の環境改善の市民事業を行なう、地域支援のできる責任ある組織=NPO法人化としてとらえるべきでしょう。

楽しく汗をかくから楽しく仕事をするNPO法人にいがた水辺の会として脱皮する段階なのではというのが世話人会や周辺の会員の認識になりつつあります。

いろんな意味で未知数の部分は多い状況です。総則、目的・事業、会員、役員、総会、理事会、評議員会、事務局・職員、資産・会計、変更・解散・合併、公告、雑則などの定款を決め申請したいと考えています。当面は常駐スタッフは無理ですし、少なくとも今の水辺の会との違いはそんなに大きくありません。あるとすれば責任を明確にするためいろんな仕事を事業として取り組むことになります。運営も会計も今以上に透明なガラス張りの中で今以上に多くの汗、知恵、資金、時間を集めなければならないでしょう。新聞紙上の加藤・鳩山NPO対談でNPOの公益的役割の拡大が不可欠となること、税金や収益事業への課税等への改善が1年以内の国会で議論することが載っていました。

■NPO法人にいがた水辺の会の将来像イメージ（素案）

◇目標として
1.水辺を考える会から汗をかき、責任をとる会へ。
2.水辺の再生のための市民事業を考え実践する。
3.多くのボランティア、専門家の熱意を持続的に集める。
4.川守を育てる"川業"で人財を生み出す。
5.市民側から政策や計画の提案、提言を出す。

◇具体的事業として
1.情報ネットワーク・Infomation
／水辺だより発行、ホームページ開設、通船川ニュース、つうくり通信、水関係情報誌投稿、全国水環境会議、川発見マップ、水辺の市民史・川遊びマップ
2.公開協議・組織ネットワーク・Forum・Network
／全国シンポジウム開催（第8回水郷水都会議、第7回自然復元研究会、ラムサール全国シンポ、第8回水環境全国交流会）水辺の環境改善ワークショップ：通船川ネットワーク、通船川ルネッサンス21、つうくり市民会議、にいがた市民環境会議、信濃川ﾌｧﾝｸﾗﾌﾞ、ねっとわーく福島潟、佐潟懇話会、にいがたまちづくり学会、全国メダカ保全協会、水郷水都全国会議、水環境全国交流会、全国水環境北陸地域ネット
3.教育・指導協力・Education
／国・県・市町村行政の川づくり研修協力、川の環境講座、公民館の環境講座、市民大学の講座、小中学校の総合学習などの協力
4.調査・研究・Reserch・Workshop
／市民レベルの川発見、水源探訪、国内外川づくり発見ツアー、廃油石鹸づくり、水辺のエコマネー研究、水辺の再生手法の研究、川畑研究
5.支援・交流・協働・Support・Collaboration
／にいがたの水辺賞、潟の活用見試し、水辺の緑化支援、Eボート大会開催、花筏協働、カヌー下りツアー、水辺のまちづくり国際交流、水辺の流域産業交流
6.計画・政策・Planning・Advocacy
／新潟川づくり提案、マスタープラン、川のワークショップ、河川懇談会、パートナーシップでの通船川マスタープランづくり、流域環境の再生事業
7.市民事業・運営・管理・Project・Management
／川のクリーン作戦、施設活用運営管理、ナローボート等川業起業経営

市民事業を新しい公共として創造してゆくこと、それを支援してゆくことがNPO法人にいがた水辺の会の目的使命（使命共同体）のイメージです。

世話人　相楽　治

REPORT 水辺活動レポート

利根川上流域で自然ふれあい林業体験に参加

1999年7月10日(土)～11日(日)、水辺を考える会会員4名は関越トンネルを通って、首都圏の水源、群馬県水上町の藤原大利根に出かけてきました。参加したのは大崎、渡辺(朝)、斎藤(芳)、進の4名。参加した催しは、緑化事業や環境教育の啓発などを手がける財産法人サンワみどり基金が毎年行っている「自然ふれあい楽習プログラム」。今年で3年目の取り組みです。渡辺(朝)さんは2回目、あとのメンバーは今回初参加。

財団法人サンワみどり基金は、ちょうど公害問題が大きく社会的にクローズアップされはじめた昭和46年に三和銀行が母体となって設立されたものです。

標高900m～1,200mに広がる「水源の森」がフィールド。「水源の森」は林野庁の緑のオーナー制度(分収育森)を利用して作られたもので、広さは15ha、樹齢100年を超えるブナやミズナラに針葉樹が交じり合った天然樹林が上半分を占め、下半分はカラマツの人工林と原生風景林からなっています。

また森には、クマ、カモシカ、テンなどの居る形跡が良く見つかっているそうです。植相は新潟の森と良く似ています。

プログラム1日目は、林業体験学習、2日目が森内ウォッチングと料理教室です。参加者は、基金関係者、地元の学校の先生たち、絵のコンクールの審査員の人たち、NPOの人たち40名。

標高900mとはいえ、暑い中、虫よけスプレーをしっかりかけて、間伐班と笹刈り班に分かれ、なれない作業を開始した。広大な森を相手に大汗をかきながら、林業の大変さの一端を体験しました。2日目の頂上往復の森内散策は、遠くに谷川連峰をかいまみながら、しみじみと森の良さが感じ取れる大変すばらしいものでした。

財団法人サンワみどり基金では、今後も公益的機能を重視した森づくりを国と事業者と市民が、連携した参加型森づくり事業として展開していきたい。そのために広くボランティア団体やNPO、NGO団体から参加してほしいと呼びかけています。水辺を考える会の事業とも連携をしたいと申し入れが有りました。

世話人　進　直一郎

水辺シンポジウム前半のまとめ

水辺シンポの前半では通船川の再生とパートナーシップということを中心に通船川のマスタープランについて議論が行われました。通船川については多くの方々が大いなる想いをこの川に寄せています。それぞれすばらしい「夢」を持っています。しかし、個人の力だけでは通船川を変えていく大きな力にはなりません。これを乗り越えるためにはしっかりしたパートナーシップの確立が欠かせません。そのため新しい「通船川のマスタープラン」を核にしてこのパートナーシップを住民・行政・企業等の関係者に張りめぐらし、情報の共有化と夢の共有化をはかっていくことが必要であるとの意見が出されました。

万代市民会館にて（写真提供：梶さん）

マスタープラン自体は1997年に水辺の会で作ったものがありますが、これにとどまらずに新たな視点で多くの協議を経て早急にまとめる必要があるとの意見も出ました。近年「公(おおやけ)」の概念が希薄化していく社会においてこれを確立する共通の「場」こそが通船川とそれを取り巻く人びとのネットワークなのではないかということがのべられました。これを受けて市民の側にもこれを引き受けていく主体的な動きとその受け皿が必要であるとの結論に達しました。

（後半編は次号51号にて）

世話人　五十嵐　實

県外水辺レポート REPORT

「川」とかわすあしたの約束Part2
－大河をつなぐ、忘れられし通船川－

新潟から「川とのかかわり」を考えるキッカケを提供しようと『「川」とかわすあしたの約束Part2」』を開催します。信濃川、阿賀野川をつなぐ全長8.5kmの"都市の川"通船川を事例に、都市・川でどんなに楽しく活動しているかを紹介し他の地域の方々と川の再生の可能性を探ります。

■200年2月25日（金）～27日（日）
10:30～19:00（27日は17:00まで）
展示・解説・ビデオ・"佐渡航海8m丸木舟"

■26日（土）14:00～15:30
鼎談：「くらしの中の川」をめざして
広松　伝・星島卓美・大熊　孝

■27日（日）14:00～15:30
リレートークショー：川端会議「忘れられし川」
横山　通・森山奈美・森　清和
大沢浩一・島　正之

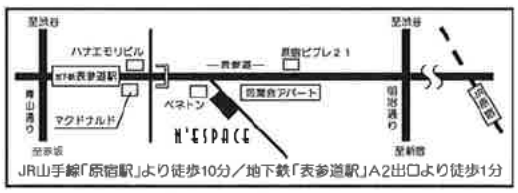
■場　所：表参道・新潟館　ネスパス
渋谷区神宮前4-11-7（地下鉄表参道駅近く）
TEL 03-5771-7711 FAX03-5771-7712

■主　催：財団法人ニューにいがた振興機構

■企　画：新潟の水辺を考える会

■協　力：通船川・栗ノ木川下流再生市民会議
通船川ネットワーク
通船川ルネッサンス21

表参道・新潟館　ネスパス　加藤　示貴



「ドブ川サミット」を開きましょう！

1999年6月に、石川県七尾市に株式会社 御祓川（みそぎがわ）が設立されました。御祓川は七尾市の中心市街地を流れる都市河川ですが、県内一の汚染河川のレッテルを貼られてしまいました。夏になると「イヤ～」な臭いがするドブ川です。株式会社御祓川は、この川の再生と周辺のまちづくりを目指して、「御祓川の浄化」「周辺の賑わい創出」「コミュニティ再生」を事業の3つの柱として、企業との共同研究や商店街の店主対象のマーケティング塾、川のほとりへの出店プロデュースなどをやっています。

レッテルの貼られている御祓川

何も声に出さない御祓川ですが、この1本のドブ川から広がる想像力は無限です。川は山であり、海であり、わたしたちの生活です。

政治・経済・文化・教育…そのすべてが、このドブ川が表象されているのではないでしょうか。全国に山のようにある川と、それにまつわる衰退と再生の物語から、私達がやるべきことが見えると思うのです。だから「ドブ川サミット」を開きましょう！情報交換だけではなく、川の声に耳を傾けることから始めたいと思います。全国のドブ川に関わる方々、あるいはかつてのドブ川の再生に関わる方々の情報をお待ちしています。「ドブ川サミット」は2000年秋に開催予定です。

株式会社　計画情報研究所 七尾研究室
株式会社　御祓川

森山　奈美

REPORT 海外水辺レポート

水祭り
－カンボジア・プノンペン－

カンボジアの総人口約1,100万人。そのうち首都プノンペンに約300万人が集まる大規模な水祭りです。周辺の渋滞の様子は、首都を流れるメコン川の支流トンレサップ川周辺をのぞけば、それなりに移動が可能です。バイクには3人まで乗れる規制があるはずです。しかし、町中にそれ以上の人数が乗ったバイクもあふれています。バイクに免許は必要なく、何人でも乗れるだけ乗っているのが現状です。雨季から乾季の変わり目にはメコン川本川の水位が下がり、琵琶湖の33倍にも膨れ上がったトンレサップ湖の水が、トンレサップ川から本川に順流するようになります。この時期、11月中旬の満月の日を中心に、3日間にわたって水祭りが行われます。毎年同じ日に行われるわけではありません。

水祭り（プノンペン）

祭りの中身は日本橋（日本のODAで建設された橋）の下流からスタートし、王宮の前にあるゴールに向かって2kmくらい下るボート競技です。40人乗り二艘のボートで勝敗を決め、トーナメント方式で勝ち上がります。参加艇は約3,000艘で、三組に分かれます。男性は立ちこぎグループと座りこぎグループの二つ、女性は一つ。各グループの勝者には約78,000円の賞金が王宮または政府高官から直接渡されます。勝ち上がりですから、おそらく8回から10回くらいはレースをこなさなければ勝者になれない計算でしょう。

編集鳥　高橋　正良

水辺の会　第2回海外水辺ツアー
－タイ－

1999年12月23日から27日にかけてタイ王国のバンコク、アユタヤ、ダムノンサダック等の水辺ツアーに出かけました。浅妻茂一郎さん、大熊 孝会長、大熊宏子さん、小畑裕子さん、大崎信子さん、梶　瑤子さん、相楽　治さん、進直一郎さん、田辺敏夫さん、高須恭子さん、長井一義さん、中野節子さん、三原エミ子さん、渡辺朝美さん、高橋正良が参加しました。

アユタヤにて（写真：梶さん提供）

「天高く水清ければ憂いなし」とうたった浅妻さん。「チャオプラヤ川4時間のクルーズは時間が止まったようでした」と梶さん。「とてもストーリーの面白い川」と相楽さん。「川と暮らす、川と遊ぶ。川に祈る。そんな暮らしがあることに気がつきました」と高須さん。「タイでは賑わいのある川の様々な表情を見ることができました。」と田辺さん。「水辺の生活がしごく普通でいろいろな表情を見ることができた」と長井さん。「雪道運転が、タイ国でのトゥクトゥク（トゥクトゥク：三輪車でバンコクの夜を暴走しました）のように恐ろしい」と中野さん。「不思議な雰囲気のある国」と三原さん。

なお、添乗員小島さんに相楽さんの行方不明バッグ（なぜか一つだけカトマンズまで行って戻って来た）がお世話になりました。

編集鳥　高橋　正良

県内水辺レポート REPORT

菅名岳登山

日　　時／1999年11月6日（土）
世話人／和田　日朗氏
参加人数／9人（山頂で1人プラス）計10名
天　　候／初め曇り・次第に回復
集合時間／9:00
出　　発／9:30

9時過ぎまで、参加者の皆さんを待ち、曇天の下ゲートを越えて、単調な林道を皆さんそれぞれにお喋りを楽しみながら、歩きはじめました。山裾はいまいち紅葉には早い。周辺の景色を眺めながら、これから先の紅葉に期待を膨らませながら、林道の終点に。ここで、小中止。ここからいよいよ沢沿いの山道が始まるので、和田リーダーから注意事項等を確認しあい、気を引き締めて出発。

しばらくの間、足元の悪い山道を進んでいくと、分岐点があり左手の急斜面を登ることになる。息を切らしながらこのコース一番の急登。途中でリーダーから山漆の木に触らないよう注意を受けながら。ようやくのことで、小山田からの分岐点。リーダーの休憩の一声が待ちどうしかったこと。

いつもの事ながら、このジグザグの急斜面はきつい。汗が噴き出しておる。飴を出したり、水を補給したりと、体制を立て直し、三三五五休む。ここからの丸山屋根の登りは緩やかな足元もしっかりとしたコースとなる。意外にも早く椿平に到着。天候は次第に回復し青空が広がりを見せる。リーダーから、今回は頂上まで行くぞ！との掛け声。気分はルンルン…。気を新たにして登りを開始。緩やかな屋根添えのしっかりとした山道は限り無く上へ上へと続いておる。周りの紅葉も次第に色あざやかに競いあい歓迎してくれておる。

途中、景色の素晴らしさを愛でながら、休み休みを繰り返し次第に高度を稼いでゆく。リーダーの「もうすこしだよ…」の声に励まされながら。だが、そのもうすこしが…なかなか長い。そろそろ疲れも出てくる。でも、いつかは終わりがある。遂に山頂。「バンザイ！」きつかった登りもここで終了。「お疲れさんでした。」鐘を鳴らして、無事頂上にこれたことに感謝！。

さして広くない山頂には、大勢の方々がそれぞれ楽しそうにお昼休憩をしておる。ここで一名合流。各人持ち寄ったお弁当をおすそわけし合ったり、どこからかビールを調達（？）の特技を発揮して楽しさ倍増、賑やかなお昼となる。鋭気を充分に養って、身支度を整えていよいよ下山開始。人それぞれで、登るときに苦労した人が、下るときには生返ったごときの身のこなしよう。先頭をきって降りてゆく。椿平からは急勾配のキツイ下り斜面。慎重に下り皆無事に沢へたどり着く。一息入れて、栃の大木に敬意を表しに。ここで、記念写真。よくぞこんなに大きな樹が残っておったものぞ。

菅名岳頂上で記念写真

記念写真を終えて、沢まで戻り、今度は沢ぞいの道をゆく。途中、桂や沢クルミの大木を背景に写真パチリ！次は「どっぱら清水」それぞれが持ち寄った容器を満タンにして、きょうのクライマックス。

肩に食い込むリュックの重さも物とはせず、足取りは軽やかに。今日の山行に感謝しながら、「満足　満足　大満足！」。

長い林道も終わり駐車場にたどりつく頃には、つるべ落としの秋の夕暮れが漂いはじめておった。

リーダーの「お疲れさん！」で解散。ありがとうございました。

中川　武夫

REPORT 県内水辺レポート

「ネイチャーin新潟」裏話

1999年12月14日に自分の人生初めての（これで最後かもしれないですが…）本を新潟日報事業社より出版させていただきました。

私のこれまでの自然の中における様々な活動・体験をまとめたものです。振り返ってみると自分でもずいぶんたくさんの場所にいったり見たり聞いたりしたものだと思います。書いてある内容は自然や生き物を見てきて私が感じたことや考えたことを日報の夕刊に連載したものをまとめたものです。

考えてみると「自然」は私にとって自分を考える非常に良いテキストです。これをよく読むことの出来るようにこれからも努めていきたいと思っています。この本が出来た大きなきっかけは大熊先生が「水辺の会」でまとめたものを作ろうと一昨年の水辺の会忘年会で提案していただいたことにあります。なにを隠そうこれが直接の動機だったのです。

この本ではまた水辺の会での体験や活動もたくさん書かせていただきました。みなさんとの出会いがなければこのような本は書けなかったことでしょう。深く感謝する次第です。本当にありがとうございました。これからも「楽しく苦しく」会の活動に参加していきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

世話人　五十嵐　實

著　者●五十嵐　實
発売元●新潟日報事業社
定　価●本体1,400+税

「にいがた水探検」CD-ROM環境教育ソフト

新潟の「水」に関する素材を満載して、小学校4年生から6年生の学習内容を楽しく勉強できる、CD－ROM環境教育ソフト「にいがた水探険」を先着20名様にプレゼントさせていただきます。

応募方法は、ハガキまたは、e-mailに「にいがた水探険希望」とご明記の上、

（1）ご住所
（2）団体名・ご氏名
（3）お電話

を記入し下記にお送りください。

「にいがた水探検」CD-ROM

◇宛先:
〒951－8633
新潟市上大川前通五番町84番地
東北電力新潟支店　地域交流グループ内
新潟環境教育ソフトウェア研究会事務局
e-mail:w997202@tohoku-epco.co.jp

◇にいがた水探険ホームページ:
http://www.tohoku-epco.co.jp/niigata/mizu
◇お問い合わせ:
Tel.025－223－3151（内線2223）

東北電力株式会社新潟支店
営業・配電部　宗村　光恒

県内水辺レポート REPORT

奥三面河川遺跡 観察交流ツアーに参加して

前々号に奥三面への想いを書いた、同僚の金子さんに連れられて行くはずだったこのツアー。急な海外出張でキャンセルした金子さんにかわり、縄文好きの友人を引き連れ、はじめて新潟の地に足を踏み入れたのでありました。(1999年6月26～27日)

説明を熱心に聞く参加者

この手のイベントはどうせおっちゃんばっかりだろうと思いきや、集合場所で縄文ランチ(赤米入りおにぎり)に群がる40人をみると、ノリノリで元気な団塊女性陣、食べ盛りのハタチ前後の学生さん達に美人親娘(中学生)など、バラエティーに富んだ人揃え。

廃校舎にある奥三面遺跡調査室で発掘物を見学しながらレクチャーを受け、予習したところで三面川を遡り、目玉である元屋敷遺跡(約3,500年前)へ。川べりにあるのは石が転がるボコボコの造成地。今もある湧き水を集めて流した水路跡が縄文時代の河川改修と言われてもピンと来ないのは歴史オンチの私の感性のなさか…と思っていたら「前に来た時にはもっと発掘したものがあったのに」と言う人が。縄文人の暮らしぶりをイメージしづらいのは仕方ないことなのかも。

奥三面遺跡には今ひとつ思い入れができないものの、ダムのために閉村した農家の写真集を金子さんにみせてもらっていたので、三面ダムから上流の大がかりなダム造成工事に気が遠くなってしまいました。

交流会・宿泊をした「みどりの里」は道の駅、温泉、物産館、資料館もある朝日村の立派な施設。ダムと村の関係が秩父の大滝村に似ている。全国的な傾向か。

交流会は素敵な進行とメンバーのおかげで存分に楽しませていただきました。「新潟は水がおいしいからお米もお酒もおいしい」という新潟県人自慢の地酒を飲んでいるつもりが飲まれ、記憶が飛んでいます。

2日目の朝、二日酔いでもおいしいご飯を食べながら、なぜか会費を払い、ツアーの感想文を書く約束をしている自分がいました。うーむ、新潟、おそるべし！

最後は三面川下流の村上で日本最初の鮭の博物館「イヨボヤ会館」と周辺を見学。鮭づくしの展示の中、印象に残ったのは江戸時代の土木技師、青砥武平治の鮭ヒーローものアニメと川の中の魚がみられる水槽。単に動くものに弱いだけか…。近くの三面川は芝生広場みたいで上流のほっとするいい感じはあまりなかったけれど、水がきれいで、首都圏の人口密度の高い川を見慣れている目には新鮮でした。

竪穴式住居跡

新潟以外からの参加は私達だけだったそうですが、大熊会長、世話人はじめ参加者の皆様にあたたかく迎えていただき、楽しく過ごせました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

鈴木　聖子

北海道から和田哲也さんも参加していました。
注：編集鳥

INFORMATION 活動報告

1999年　新潟の水辺を考える会活動報告

■1月
9(土) 通船川活動計画作戦会議
22(金) 通船川チャンネル検討会
26(火) 新大工学部／近自然工法講演会;福留修文氏　多自然の川づくりの現場から取り組みの講演会;九州水の会田中秀子さん
31(日) 佐潟水鳥湿地センター／佐潟水鳥市民探鳥会;にいがた市民環境議

■2月
6(土) 長岡市商工会議所／しなの川講座;信濃川NEXT50キャンペーンWS
13(土) 第2回通船川河口WS;大熊先生ミニ講義
20(土) ウォーターシャトル『アナスタシア』進水式;ご披露グランドホテル
20(土) 新津覚路津川ワークショップ:新津市保険福祉センター
22(月) 東地区公民館／WWW3・通船川チャンネル検討会

■3月
10(水) 万代市民会館／つうくり市民会議
20(土) 第2回通船川河口WS;森泉先生ミニ講義
21(日) 山ノ下閘門33周年記念イベント
23(火) 東地区公民館／WWW3・通船川チャンネル検討会

■4月
10(土) 五泉イバラトミヨ;中村世話人と春の菅名岳登山どっぱら清水;和田世話人
22(木) 東地区公民館／WWW3・通船川チャンネル準備会
24(土) 第4回通船川河口WS;大熊先生ミニ講義
27(火) 東地区公民館／つうくり市民会議世話人会
29(木) やすらぎ堤／チューリップ生花筏WS主催にいがた花と水のまちネットワーク

■5月
7(金) 東地区公民館／WWW3・通船川チャンネル準備会
15(土) 赤塚中学校／佐潟クリーンアップ協働活動;湿地センター／佐潟懇話会
21(金)-23(日) 大潟町／第3回わくわくワークショップ（WWW3）全国交流会in大潟町
22(土) 100楽しい通船川曼陀羅絵巻づくりワークショップ　WWW3・通船川チャンネル（分科会）会場:東山の下小学校／ 120名参加

■6月
12(土) 中地区公民館／第5回通船川河口WS;池田博文氏ミニ講義
13(日) 阿賀野川中流、三川細越の森ウオッチング
19(土) 沼垂小校区内クリーン活動参加
19(土)-20(日) 代々木オリンピックセンター／第7回水環境全国交流会
26(土)-27(日) 水辺ハイキング奥三面河川遺跡見学ツアー土木学会土木史研究会共催・縄文食を喰らふ!?元屋敷集落2500年前の河川改修遺跡現場視察／みどりの里宿・会員40名

■7月
3(土)-4(日) 第2回全国川の日ワークショップ　いい川部門グランプリ受賞
11(日) ウォーターシャトル新潟遊覧の船旅;信濃川ファンクラブと共催・星島世話人講演／栗原社長講演
18(日) 長岡／NPO研究会
19(月) 新潟土木事務所／川の日ワークショップグランプリ受賞報告
25(日) 通船川／市民参加の水質調査
25(日) 長岡／第2回信濃川講座
27(火) 新潟市内／万代橋70周年記念　温故知新・新潟新まちづくりワークショップ
31(土) 新潟西海岸／にいがた夢海岸フェスティバル
31(土)-8/1(日) 高知県中村市／全国トンボサミットin高地中村
31(土)-8/2(月) 静岡県掛川市／掛川哲学大会in掛川市

■8月
21(土) 通船川外輪船Tシャツ・デビュー（在庫多数、特にLLサイズ）
21(土) 中地区公民館／第6回通船川河口WS;池田博文氏ミニ講義
21(土) 新潟市青山海岸／どんつき祭り花火大会
22(日) 信濃川やすらぎ堤／第1回Eボート大会
22(土)-23(日) 岩手県盛岡市／川に学ぶシンポジウム

■9月
4(土) 東山の下小とジャスコ裏／通船川クリーンアップ大作戦
9(木)-10(金) 新潟県土木部職員研修協力（川づくりワークショップ体験）
18(土)-19(日) 仙台市／NPOフォーラム`99東北大会
19(日) 長岡信濃川／ネイチャーEボート大会
25(土) 新潟市佐潟／佐潟ハス採り大会赤塚中と共催;野人食テンプラ付き

■10月
1(金)-2(土) 十日町市／信濃川水無しサミット
9(土) 通船川草刈り隊
15(金)-17(日) 沖縄宮古島／第15回水郷水都全国会議宮古島大会
23(土) 中地区公民館／第7回通船川河口WS;紙谷智彦氏ミニ講義
30(土) 水辺シンポジウム`99 通船川ワークショップ報告、にいがたの水辺賞
31(日) 分水町大河津資料館／大河津資料館ワークショップ

■11月／12月
11/6(土) 五泉菅名岳／紅葉の菅名岳登山;和田日郎世話人
12/11(土) 中地区公民館／第8回通船川河口WS;池田博文氏ミニ講義
12/11(土) 北陸建設弘済会ワークショップカー構想ヒアリング協力
12/18(土)総会＆忘年会
12/23(木)-27(月)タイ　チャオプラヤ川／タイ王国バンコク5日間

新潟の水辺を考える会編集部

会員紹介 MEMBER'S

安田　幸弘

[redacted]

鳥取県出身ですが、転勤で新潟に来て約15年になります。仕事は地質調査で、通船川をはじめ川や海など水辺への関りが多く、縁があって入会することになりました。現在、我社でも住民参加による川や水辺づくりなどで自然環境を考えた水辺空間のあり方に取り組んでいます。私は、いままで治水（安全）・利水等を優先して川を考えてきましたが、これを期に自然や人との触れ合い（癒しの場・親しむ場など）についても考えていきたいと思います。好きな水辺は岩場の浅瀬（笹川流れ）や川岸の浅瀬（荒川）などで、水に入って小魚などを捕まえたり観察でき、いまでもわくわくします。

熊倉　範雄

[redacted]

入会前の昨年、当誌に寄稿、www3通船川に参加。意外と豊かな通船川と周辺の自然－それらを拾いあげたマップ作りが夢の１つ。瞽女唄を聴き、碁石と戯れることも。

推奨スポットは「五辺の池」(信濃川妙見堰下流)

浅妻　茂一郎

[redacted]

タイツアーご苦労様でした。

浅妻さんから一句浮かんだので、と電話いただきまして、御紹介させていただきます。

水空融合
愛する心憂いなし
憂いなくんば愛は生じない

齋藤　倫示

[redacted]

様々なアウトドアを実践し、楽しんでいます。それらを通じて感じることは、いかに自然が経済成長路線により破壊されてきたかと、胸の痛む思いがします。賢明なる人々が開発や防災と自然との調和を「何故」実践出来なかったのか？これからでも遅くはない。是非、自然に親しむ人々が増加し、自然に対し尊敬と畏怖の気持ちが湧き上がることを願っています。新潟市内を流れる「小阿賀野川」の岸辺はコンクリートの用水路にならない事を祈っています。

岡田　秀幸

[redacted]

私の実家は北蒲原郡中条町です。近くの掘切川はそのむかし、紫雲寺潟を水田として利用できるように人力のみの作業で切り開かれました。人の力はすごいと思うと同時にもとの紫雲寺潟を想像してみたりします。

和田　哲也

[redacted]

ミンダナオ島のジャングルの中を流れる茶色の川が好きです。そのうちまた新潟に遊びに行きますのでよろしく！

Event Infomation

水辺の会関連2000年活動予定

■2000.2.25(金)～27(日)
「川」とかわすあしたの約束 Part2
「大河をつなぐ、忘れられし通船川」
表参道・新潟館ネスパス
水辺の会初めての東京開催イベントです。

■2000.3.26(日)
にいがた・盲導犬ハーネスの会
5周年記念講演会
13:00～17:00
新潟市総合福祉会館5F　大集会室
内容：記念講演「日本における盲導犬の現状」
　　ビデオ上映、デモンストレーション犬による実演と体験歩行（入場無料）
TEL 025-229-6715 赤塚
　　025-231-0888 横山

■2000.4.16(日)
菅名岳登山
和田世話人　TEL 0250-23-0820

■2000.5月
オランダ(＋イギリス)水辺ツアー
九州・東京・横浜の仲間と共に行きます

■2000.6.25(日)
通船川「草刈り・バーベキュー大会」
横山世話人　TEL 025-276-2254

■2000.7月
「川」とかわすあしたの約束 Part3（予定）

■2000.7.20(木・祝)～9.10(日)
大地の芸術祭
「越後妻有アートトリエンナーレ2000」
会場：越後妻有6市町村（十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町）

■2000.9月下旬
第4回佐潟ハス採り大会

■2000.10.14(土)～15(日)
第8回水環境全国交流会イン新潟
会場：ユニゾンプラザ・信濃川ウォーターシャトル

入会案内

この会は、遊び心半分・真面目心半分で活動しています。

ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。

自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年：1987年10月1日■目的：水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。■代表者：会長　大熊　孝（新潟大学工学部教授）■会員数：個人242名・法人16団体（2000年1月現在）■活動：水辺シンポジウムの開催/水辺ウォッチング/会報「新潟の水辺だより」の発行/「水辺環境整備に関する学習会/長野県富山県の水辺グループとの交流会/通船川、佐潟の調査・研究etc.
■年会費：個人会員2,000円賛助会員(法人など)10,000円

入会申込書

年　月

フリガナ 氏　名		男・女 歳
特技や 水辺への想い		メールアドレス
住　所	〒 （　）－	
職　業		
勤務先	〒 （　）－	

注）紙面の都合上、縮小しています。
250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。

書籍情報

里山の伝道師

著　書● 伊井野　雄二著
出版社● コモンズ発売
内　容● 定価＝本体1600円＋税

三重県名張市の赤目の森で長年にわたって里山の保全・育成を行ってきた活動が一冊にまとまった。本のあちこちから、里山を育てていこうとする著者の熱い想い（それは伝道師というタイトルにも現れている）が伝わってくる。なかでも、地元の小学校が年間通した野外授業を行い、子どもたちの心身の成長に大きく役立っていることが印象的だ。

この本の推薦者の守山弘さんは「里山をエコリゾート地に育て、子どもたちがそこで成長することを実践してみせた心踊る記録」と述べている。落葉広葉樹からなる里山は市民の手が入り、伐採されることによって、育っていく。だからこそ一人ひとりの少しの活動が意味を持っていくことが、よくわかる。

大江　正章

編集後記

『水辺だより』は50号を迎えました。高橋、杉山(泰)、杉山(義)コンビで担当したのは30号でした。ちょうどこの編集後記を入力しているとき、吉野川第十堰の住民投票が行われています。多数決だけによらない話し合いの民主主義が50号の大熊会長の巻頭言にあるよう、時代は揺れ動いています。水辺の会は誰でもどんな立場でも自由に意見が言える会で、多数決原理だけでは動かない会です。それじゃ腹話術や腹芸で動くのかな？

編集鳥　高橋　正良

●事務局：株式会社グリーンシグマ内(e-mail:sagara@g-sigma.co.jp)
〒950-2111 新潟市大学南1丁目7821-5
Phone 025-263-2727　Fax 025-263-1134
(電話番号が変わりました)
●編集局：株式会社サザンウインド内 (e-mail:masayosi@on.rim.or.jp)
〒951-8134 新潟市関屋1422-10
Phone 025-234-1153 Fax 025-234-1173
●URL：http://www.on.rim.or.jp/~sugiyama/mizube.html